



遠里小野は菜種油発祥の地ってご存じですか？ ～熊野街道を黄色一色の「菜の花街道」に～



「菜の花を咲かそう会」会長 **吉田 進さん**

昭和19年住吉区生まれ。サラリーマン時代はシステムエンジニアとして活躍。定年退職後に歴史に興味を持ち、大阪城や大和古墳の实地調査を経て、「菜の花を咲かそう会」会長のほか「NPO法人すみよし歴史案内人の会」の前副理事長として、住吉区の魅力発信のために精力的に活動している。

今回は、かつて有数の菜種油の産地であった遠里小野地域で、菜の花文化の啓発や菜種油製造技術の継承のために活動を行う、「菜の花を咲かそう会」代表である吉田進さんにお話を伺います。

菜の花や菜種油をきっかけに、遠里小野のまちを元気にしたいという吉田さんの思いや、普段の会の活動について、また、昨年10月に行われたイベント「熊野街道に竹灯籠を灯す」についてお話を聞きながら、まだまだ知られていない住吉の歴史文化について見聞を広めましょう。

「菜の花を咲かそう会」発足のきっかけを教えてください

日本の菜種油発祥の地で菜の花文化をもう一度

遠里小野は、古代より棒（はしばみ）から搾った油を住吉大社のご神灯のために奉納しており、日本の搾油発祥の地と伝わる歴史薫るまちです。江戸時代には、遠里小野の農家が菜種油の製造方法を開発。その品質の良さから大阪一帯へと広がったものの、明治～大正時代の電気照明の普及に伴って菜種油作りは衰退。春の野を黄色に染める菜の花畑の風景も見られなくなりました。

時を経て、会発足の契機となったのが平成21年の出来事。「伝統野菜を育てる会」の会員が自宅で発見した菜の花の古来種を発芽させ、翌年には住吉大社での栽培に成功。当時の神職から遠里小野と菜種油の歴史を伺ったことで、菜の花栽培と菜種油製造技術の保存再生活動の意義を感じ、平成23年に会を発足しました。



普段はどのような活動をされるのですか？

菜の花栽培や搾油を通して地域の活性化をめざす

会員は現在74名。毎年9月に菜の花の種をまき、花づくりボランティアの皆さんとともに「花づくり広場」で育てた苗を、10月末頃に会員らに配布して各家庭で育成しています。翌年3～4月に咲いた菜の花の美しい風景を区民の皆さんに楽しんでもらった後、5月に刈り取り、6～7月に種を取って油を搾り、その一部を住吉大社に奉納しました。「すみよし博覧会」では住吉大社の灯籠100基にも点灯して神秘的な灯籠の灯りを見ることができました。

地域の子どもの搾油技術を伝える

遠里小野小学校への出前授業として、「菜種の油搾り体験」を実施しています。菜種10キロからとれる油は約1～1.5リットルとわずか。実際の手搾り器を使った体験は、子ども達が先人の苦労や知恵を知る貴重な機会になっています。

また、熱心な会員が江戸時代の古書をもとに、昔の油搾り器「しめ木」を1/3サイズでの復元に成功。出前授業やイベントで展示し、菜の花文化の啓蒙に努めています。

会発足時は、地域と菜種油の歴史を知らない



▲油搾りについて説明する吉田さん

会員がほとんどでしたが、活動を続ける中で「菜種油の里」としての地域愛の深まりを感じています。

復元された昔の油搾り器▶



菜種油のまち、遠里小野から火を灯す！ 区民との交流にも力を注いでいます

昨年10月に「熊野街道に竹灯籠を灯す」を開催！ 幅広い世代の方にご参加いただきました

昨年10月8日、遠里小野を通る熊野街道を舞台に、菜種油キャンドルを灯す催しが、おりおの地活協との共催で行われました。

イベントに先立ち8月、キャンドル用の竹灯籠を用意するため、地元住民や大阪公立大学の学生らが「竹取ボランティア」として、竹林を伐採し遠里小野小学校まで運搬。その後、竹灯籠の製作と菜種油を使ったキャンドル作りに取り組みしました。

当日は、約700mの街道両側に約650基の竹灯籠を設置。地元小学生らの願いが書かれた竹灯籠も並べられ、菜種油のほのかな灯りで街道は幻想的な雰囲気に。地域内外から多くの人が見学に訪れ、地域活性化にも貢献することができました。



竹灯籠の製作をする皆さん



菜種油を使った竹灯籠

☎政策推進課 3階☎番窓口 ☎6694-9842 ☎6692-5535